

龍門二十品 拓本見つかる

中国の古都・洛陽郊外の龍門石窟に刻まれ、書道の手本として高名な「龍門二十品」を19世紀前半に写し取った貴重な拓本が京都大人文学研究所から見つかった。研究所の安岡孝一教授や稲本泰生准教授らが製本して出版し、近くインターネットで公開するという。

国内最古級、京大人文学科から

龍門二十品は北魏時代の4

95〜520年に彫られた20種の文で、南北朝（六朝）時代の「六朝楷書」を代表する書として知られる。仏像のそばに彫られ、像を造った由来や皇帝の威光が長く続くこと、家族の長寿などを願う文句が書かれている。

18世紀以降、書家らに尊ばれ、現在でも書の教科書に掲載されるなど書道の世界で人気は根強い。だが、繰り返し拓本が採られるなどして原石が傷んできているため、状態が良い時代に採られた拓本は



見つけた拓本。龍門二十品の中でも有名な一つ「牛欄（ぎゅうけつ）造像記」の拓影には、尉遲（うつち）という女性が亡き息子の牛欄のために仏像を造ったことが記されている

出版・ネット公開へ

貴重とされる。

京大では、明治から昭和に活躍したインド学・仏教学者で、同研究所の前身の東方文化研究所の所長を務めた松本文三郎博士が拓本を大量に収集していた。今回、改めてコレクションを整理したところ、拓本が見つかり、文字の削れ方などから19世紀前半に刷られたものであることが判明した。国内では最古級の拓本だという。

研究所は原寸大に印刷して研究者向けに300部を出版。好評であれば一般向けの出版も検討するという。稲本准教授は「はつきりと力強い直線などには楷書の原形が見て取れる。書の歴史において一級の資料だ」と話した。同研究所は設立以来80年以上、中国の碑に刻まれた拓本を集めてきた。2004年から主要な拓本をデータベース化して公開し、1日2万件を超えるアクセス数がある。

（波多野陽）